

奈留まちづくり協議会

人口 2029人

世帯数 1274世帯

設立 平成26年2月

(令和3年10月末現在)

地域の現状と課題

奈留町は長崎市から約100㎞西方に位置する五島列島のほぼ中央にあります。島の大きさは東西約9㎞、南北約12㎞で、複雑に入り組んだ地形が天然の良港をつくり出し、昔から漁業の島として栄えてきました。

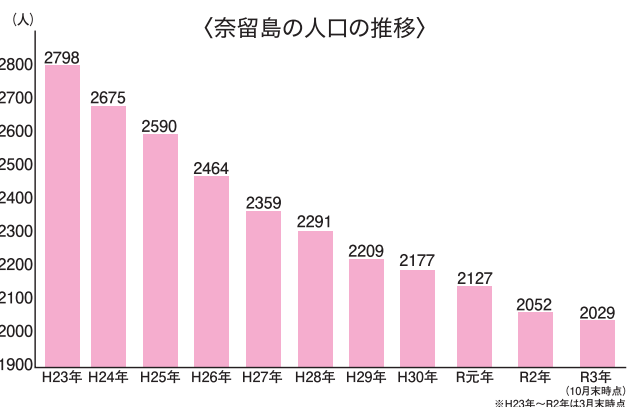
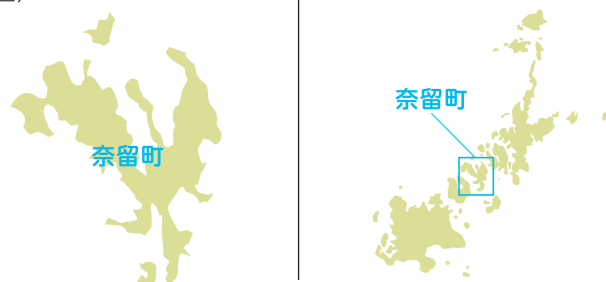
町の人口は、ピークだった昭和30年代には9千人を超えた時期もありましたが、漁業の衰退とともに人々が島を離れ、令和3年10月末時点で2029人まで減少しました。人口全体に占める65歳以上の高齢者の割合(高齢化率)は56.3%。子どもだけではなく、20~40代も少なくなっています。

巻き網船団の一大基地だった時代は多くの飲食店が建ち並び、活気があった港付近や中心部も、今ではシャッター街に変わりました。令和3年には、町に2社あったタクシー会社が1社になり、飲食店も減少。スーパーなどの小売店の経営も厳しくなっています。

平成30年に江上天主堂を含む周辺の集落が、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産となって以降、奈留島を訪れる観光客は増えました。ただ、五島市の中心部となる福江島まで、船で約30~45分の距離ということもあって、宿泊は福江島になるケースも多いのが実状です。

このような、地域が抱える各種課題の改善を目指して活動しているのが、平成26年2月に発足した「奈留まちづくり協議会」です。

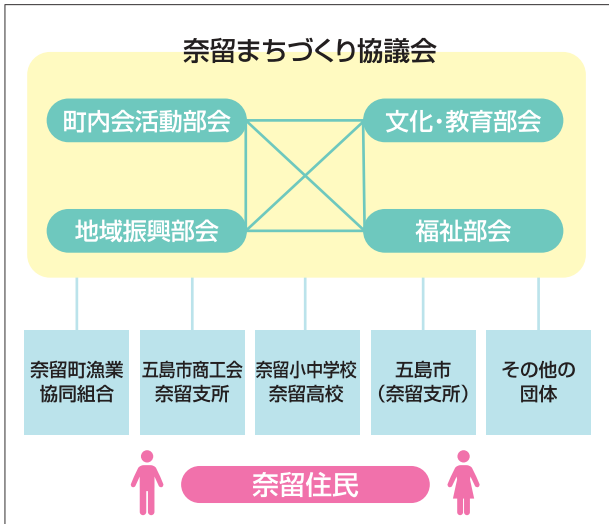
〈拡大図〉



奈留島の江上集落=平成30年2月、五島市奈留町



木立の中にたたずむ江上天主堂=平成30年2月、五島市奈留町



奈留まちづくり協議会の組織図



奈留島サンタランの参加者=令和3年12月、奈留港ターミナル前

現在の主な活動内容

奈留まちづくり協議会は、地域の特性を活かしたまちづくりを住民全体で進めていこうと、五島市の「地域の絆再生事業」において、モデル地区の指定を受けてスタートしました。奈留町の住民を会員に、町漁業協同組合や市商工会奈留支所など各団体の代表45人が代議員を務め、地域振興部会をはじめとする4部会に分かれて活動しています。月に1回程度、各部会の定例会で地域課題を協議していますが、メンバーは「地域でまとまらないといけない」という意識が高く、

活発な意見交換があります。

事業は充実しており、平成27年から江上天主堂の保全を目的としたチャリティーイベント「奈留島サンタラン」を開催し、盛り上がりを見せています。奈留港ターミナルから江上天主堂までの7.7kmを、サンタクローズの格好をした島民らが走ったり歩いたりして巡り、参加費の一部が同教会の維持管理費に活用されます。全国から参加者が集まる大規模な綱引き大会(令和2、3年はコロナ禍で中止)は、30年以上続くイベントとして定着しています。令和3年度は計19の事業を計画しました。

〈買い物支援事業の取組〉

協議会は長崎県の小さな楽園づくり事業に取り組みにあたり、平成27年に住民アンケートを実施。結果、生活で困っていることのトップは「買い物」でした。スーパーなどの店舗が中心部に集中しており、近隣に店舗がなくて買い物が不便な集落が多いという課題が浮き彫りになりました。

これを受けて、協議会は平成27年から買い物支援事業を計画しました。冷蔵機能付きの移動店舗となる軽貨物車を購入し「奈留島便利Car(カー)」として、奈留商業振興会に無償で運用を委託。島内のスーパーが実務を引き受けました。販売担当者が便利カーに店の食品や日用品を積み、15の集落をそれぞれ週に1～2回



買い物支援事業



買い物をしながら会話を楽しむ住民たち=令和3年11月、五島市奈留町

巡るスケジュールで運行。収益はスーパーが得る仕組みです。

令和2年は運行日数254日で延べ約5800人が利用しました。集落に移動販売が来ると住民が次々に集まり、買い物をした後もしばらく“井戸端会議、に花が咲きます。買い物支援が交流の場の提供や、販売担当者による高齢者、独居者の見守り支援にもなっています。

このところ、ネットスーパーが配達範囲を奈留島まで広げたり、福江島の事業者が野菜などの食材販売に参入したりと、島民が買い物をする手段が増えている側面もありますが、高齢者の「商品は直接見て買いたい」「会話するのが楽しい」「インターネットは難しい」という声もあり、便利カーは重宝されています。



奈留島便利カーで買い物をする住民＝令和3年11月、五島市奈留町

POINT

- ・アンケートで住民の声を収集
- ・買い物弱者を減らす努力
- ・地域交流の場や見守りの役割も

INTERVIEW

移動販売を1人で担当して、令和3年で4年目になりました。月曜～金曜の午前と午後の各2時間ほど、1日3～5の集落を運転して回ります。総菜や刺し身、パンなどの食品や、洗剤、紙製品などの日用品を中心に提供しています。

お客さんの要望に沿った商品をプラスしていくうちに、商品数も増えました。重量が増えると車に負担がかかるので、荷物を減らした方がいいのは分かっていますが、各集落には



移動販売担当
宍中 津多恵さん

お客さんの笑顔が原動力

週に1、2回しか商品を持って行けません。少しでも品ぞろえを良くするように心掛けています。

各集落に行けば、お年寄りが待っていて、楽しそうに買い物をしてくれます。皆さんの「助かる」「ありがとう」という言葉を聞いたり、笑顔が見られたりするとうれしいです。便利カーに頼って生活しているお客さんもいるので、運行する意義を強く感じます。課題も多いと思いますが、今後もぜひ続けてほしいです。

行政からの支援

奈留島便利カー事業は長崎県の小さな楽園づくり交付金を活用して購入。最初の2年間は走行分の燃料費も補助しました。その後はスーパーの自主運営に移行しています。

その他の事業は五島市の地域の絆再生事業交付金を活用。サンタランや産業祭などのイベントをはじめ、地区を花壇で飾る環境整備や、地域の高齢者を対象とした座談会の開催、子育て支援などに取り組んでいます。



花壇整備事業で整備された花壇＝令和3年3月、五島市奈留町

今後の課題・展望

移動販売をいかに継続させていくかが課題です。これまで便利カーを運行していた事業者の「令和3年末で運行を終えたい」という意向を受けて、協議会で新たな委託先を探し、令和4年1月から島内の別のスーパーが引き継ぐことになりました。今後も、運営するスーパーと定期的に話し合いながら課題を共有し、地域住民のライフラインであるこの事業を絶やさないための策を考えておく必要があります。

このほか、地域のニーズに対応した取組として、

令和3年度から新たに、協議会公式LINE(ライン)の運用を始めています。奈留の暮らしで必須となる船の運行情報などを中心に、家族やご近所さんに伝えるような気持ちで、協議会だからこそできる地域の情報発信を心掛けています。



協議会公式LINEのチラシとロゴマーク

INTERVIEW

奈留島で生まれ、一度は島外に出ましたが、社会人になって島に戻ってきました。協議会の発足に携わり、令和2年に2代目会長に就任。本業は電機店ですが、奈留島の焼酎をプロデュースするなど、さまざまなまちおこしの活動に取り組んでいます。

焼酎に着目したきっかけは、平成16年に旧奈留町が合併して五島市の町になったことです。このままでは「奈留島」という名前が埋没してしまうという焦りを感じまし

助け合って事業の継続を



会長 原中 誠致さん

た。島の名前を残したい、知ってほしいという思いで、有志を募って平成28年に奈留島特産の「七福芋」を使った焼酎作りを企画しました。

まちづくり団体の中には、運営が厳しくなったり、消滅したりするところもあるようです。私たちの協議会はいろいろな団体で構成していて、幸いにもまだ各グループ・部会で活動ができています。今後、それぞれの活動で困ったことが出てきた場合は、グループ・部会の枠を越え、助け合って事業を継続していきたいです。

まとめ

- ① まちづくりを住民全体で進めていくことを目的に設立
- ② さまざまな団体が助け合いながら活動
- ③ アンケートで住民の声を収集
- ④ 買い物弱者を減らす努力
- ⑤ 移動販売車は地元商業振興会に無償で運用を委託し、収益はスーパーへ
- ⑥ 移動販売が地域交流の場や見守りの役割も

取材を経て

移動販売を利用する集落の人と接して、便利カーがいかに必要とされているかが伝わってきました。高齢になると、住み慣れた島が一番良くて生活ができなければ「島外の子どもや親戚のところに行くしかない」と考える人も出てくるでしょう。移動販売の運用停止が一つのきっ

かけになることも予想されます。

「買い物支援は何とか続けたいです。島の生活を守り、島を残さないといけないと思っています」と語る会長のように、地元を大切に思う人たちが、協議会にはたくさんいます。小さな離島ならではの、生活に直結した深刻な課題を抱える中で、協議会の存在の大きさを感じました。